スウェーデン便り（６）　　橋本白道（陶芸家）

［発行日］＝1999 年 11 月 2 日

［本文］

時間割り：下

水曜日から金曜日までの三日間は、セラミックの教室に行く。一年生が五人、二年生が七人いる。二年生はそれぞれ、自分のテーマを持って制作に集中している。必ずしも教室に居る必要はない。一年生は、カタリーナ先生のプランに沿って仕事を進めるのだが、ほとんど皆、やりたいようにやっている感じである。

今は、手びねりで大きなものを作っているのだが、少し積み上げたら、ある程度、乾燥するまで待たなくてはならない。その合間に、私は笛を何本か作り、日本から持参したお茶を飲むための器などを作った。

一年生のイレーネさんは獣医で、動物ばかり作っている。架空の動物のようなものなど、びっくりするくらい上手である。先週、飼っている蛇に噛（か）まれて、一週間ほど入院していた。未（いま）だに包帯が痛々しい。

手取り足取り教えるような授業ではない。例えば最初の授業は、白い土と黒い土をひとかたまりずつ渡して、「私は誰（だれ）か？」というテーマで作りなさい、と言って、先生は二階の部屋へ去って行った。質問があれば電話をする。もちろん、直接、訊（き）きに行ってもよい。ラジオと電話は鳴りっぱなしだ。

先生の友人の穴窯の窯焚（かまた）きに行ったり、湖のそばで、チョコレート入りのバナナのバーベキューをしたり、とソーシャルプログラムも色々ある。今週の金曜日には朝八時出発で、バスをチャーターしてヨーテボリまで、写真の大きな催しを見に行く。

夜のプログラムというのもある。

先週から、月曜日の午後六時半から九時まで、シルバーのクラスに通っている。これは、二年生が二人、先生として教えてくれる。手始めにカミさんのために指輪を作った。結婚指輪どころではなかった若年のつぐないを、このあたりで埋め合わせておこうと思ったのかもしれない。この時間は、セラミックやテキスタイルの教室でも、二年生が教えている。火曜日には、フォトも始まった。

学外の催しも多い。ティダホルム・コミューンという、郡のような単位で、行政が企画した催しは文化サークルなどを中心に、数え切れないくらいある。私は「移民の人たちのためのスウェーデン語講座」に行きたいと申し込んだが、今のところ六人の定員に満たないため、先送りになっている。また、先週から四週間連続で、名画上映会が始まった。四本で千二百円である。

夕食のあとは何をしているのかというと、だいたいがセラミックの教室で、ごそごそと何か作っている。暗室で写真を現像していることもある。これからは、シルバーの教室にいる

ことも多くなるだろう。コンピューターでメールをやり取りしているかもしれない。テキスタイルは今のところ、時々のぞく程度である。リトグラフスクールは、スウェーデンでは三つくらいしかないそうで、なかでも、ここは一番の学校だと聞いた。

どの教室も九時ごろまでは、誰かが何かを作っている。自分の部屋のカギで、どの教室にも入れる。何をやってもいいのである。